

学術研究賞 キャロライン・シー・ハウ

【贈賞理由】

キャロライン・シー・ハウ氏は、人間愛に貫かれた鋭く美しい文章を紡ぐ、21世紀アジアの知識人である。東南アジア地域研究、文学研究、小説執筆と、多彩な分野で活躍する。

ハウ氏は1969年マニラ生まれ。フィリピン大学を首席で卒業（英文学）。アメリカのコーネル大学大学院で東南アジア地域研究の泰斗ベネディクト・アンダーソン（福岡アジア文化賞学術研究賞受賞）に学び、ローリストン・シャープ賞と博士号（英文学）を得た。1998年フィリピン大学助教授に就任。1999年京都大学に移り、2025年まで教育・研究に尽力した。

8冊の著書にフィリピン国立図書賞が贈られ、日本語・中国語・インドネシア語・スペイン語・ドイツ語に翻訳された。アメリカのアジア研究協会グラント・グッドマン賞（歴史研究）、フィリピン作家協会バラグタス賞（英語小説・文芸評論）にも輝く。

博士論文に基づく *Necessary Fictions: Philippine Literature and the Nation, 1946-1980* (2000)、*On the Subject of the Nation: Filipino Writings from the Margins, 1981 to 2004* (2004) は、スペイン・アメリカ・日本の支配を経た自国文学の系譜を、ナショナリズム論の視点から問い直す秀作である。

自らの生立ちも関わるチャイニーズ系フィリピン人のアイデンティティという課題にも挑み、越境する人々と世界の繋がりを捉えた。 *The Chinese Question: Ethnicity, Nation, and Region in and Beyond the Philippines* (2014)、『中国は東アジアをどう変えるか』（白石隆と共著、2012）は、その成果である。

The Elites and Ilustrados in the Phillipines Culture (2017) では、少数のエリート層と欧米教育を受けた新知識人層の支配が植民地期から独立後へと継承された自国史を論じ、*Interpreting Rizal* (2018) では国民的英雄リサールの作品に新解釈を施し、ポストコロニアル批評の真骨頂を示した。

最近では小説の創作に励む。短編集 *Recuerdos de Patay / Lukisan Perkabungan* (2015) と昔話集 *Demigods and Monsters: Stories* (2019) に続き、長編小説 *Tiempo Muerto* (2019) では、苦難に負けず前進する女性たちの語りを感動的に叙述する。

エスニシティ、言語、宗教、貧富や教育の格差、国籍、ジェンダーなどに引き裂かれても、人々は生き抜いてきた。ハウ氏は、英雄や悪役、庶民や移民や女性の姿に、未来を選ぶ人間的自由を見出す。分裂の深まる現代世界の人々に力強くも温かい言葉を送るキャロライン・シー・ハウ氏は、まさに「福岡アジア文化賞・学術賞」にふさわしい。